

富士山を学び

環境保全の意識を育む

ふじさんネットワーク副会長
NPO法人ふじ環境研究所所長

山田辰美さん



二面性が魅力の富士山

ふじさんネットワークに入会したのは、富士山周辺での環境活動を団結させ、二つの方向に向ける役割を頼みたいと県から依頼があったことが発端です。私自身、富士山とは長年の関わりもあり、大きな環境保全活動の必要性を感じていたので、入会しました。

生態研究だけでなく、2000年からは、富士常葉大学（現…常葉大学）として富士山の自然林復元活動に参加してきました。さらに、世界遺産登録への新しい機運もある中で、富士山に関する様々な研究を学際的な学問として展開しようと杉山恵一先生と富士学会を立ち上げました。私は、富士山というものは、富士山のように裾野が広く、地域に根付いたものでないといけないと考えています。富士山を誇らしく思う静岡県民が、その魅力を知ることにより愛着を持てると思ひ、ふじさんネットワークに関わっています。

富士山は、唯一無二の存在ではありませんが、見る角度によって表情が全く違うのです。火山側線はしなやかで、緩やかな広い裾野から次第に立ち上がり、やがて屹立し、頂上に



達する、その美しさ故に唯一無二の山だと言われます。しかし、間近に見ると、その裾野にはガリー（雨裂）の発達した急な崖もあり、溶岩でこつこつとした荒々しい山でもあり、遠くから眺めた印象と全く違う。この二面性もまた富士山の魅力です。そのような富士山を自分なりに極めたいと思い、富士山と関わってきました。富士山はみんなの山であり、人それぞれに少しずつ異なる「俺の富士」があると思います。みんなの富士山を大事にするにはどうしたらいいかと考えています。

私は、生態学者であり、特に水生生物が専門です。標高1000m以上の富士山には、まとまった水辺がありませんが、そこにこそ富士山の秘密が隠れていました。川も池もない所に、一時的な水域として、プラスチックの桶やシートで浅いプールをつくってあげると、水の匂いを嗅ぎつけてカエルが

富士山を守ることは森を守ること

たくさん集まります。実は富士山の森には水辺で繁殖するカエルがたくさんいるのです。富士山の自然環境は、専門的な目でもよく見ないと、どういう生き物が自然を支えているのかわかりません。私はいまでも、富士山の自然に詳しい人に聞いたり、案内してもらったりすることで、多くの有益な情報を得ることができています。

富士山を守る方法って何だろうと考えた時に、森を守る事が最も有効だと思っています。富士山の標高が高い場所には永久凍土があり、地盤はしっかりと固まっているが、標高3000m



以下では、土質がもろく、風化作用を受けて崩れやすいのです。雨水が地表を表流水として流れると、裸地だけでなく植林地の中にもガリーが発達して谷ができ、山体を傷つけています。また、近年、森の自然を脅かしているのは鹿であると認識し、森林管理署と共同研究の協定を結び、一緒に鹿から森林を守る活動にも力を入れています。ヒノキの年輪調査から鹿の食害が60年程前から始まっていたと分かってきました。富士山の鹿は伊豆の鹿に比べて、大きく脂がのっている。仮説ですが、富士山麓の連続した森林の中で季節によって食物となる植物が繁茂している標高を選び、移動するようです。標高1400mほどの自然林でカメラトラップによって調査した結果、出現した中、大型動物の内、約88%もが鹿でした。増え過ぎた鹿によって、林床の植生や昆虫類までが影響を受け、いびつな生態系になっています。

富士山を 自然への興味の 入口にする環境教育

平成11年にふじさんネットワークが設立されましたが、私は平成19年

以降副会長として仲間と共に富士山の魅力を発信しています。私自身、環境教育の発信や実践に関わり、ふじさんネットワークで発刊する「富士山からの挑戦状」という冊子作成に携わっています。これは主に小学生を対象とした教材であり、富士山の自然に関する興味ある話題をイラストや写真を使って紹介してあります。3択の旗揚げアンケート方式の問いから各項目が始まっており、知識が無い人でも楽しく学習に参加できるような構成になっています。じゃんけん方式で答える問いによって、みんなと一緒に分かり易く学べます。この冊子は富士山から自然の理(ことわり)を学んでもらいたいという考えで作っており、中には、事情通でない知らない質問も盛り込んでいます。この冊子を用いた授業を通じて、富士山に興味を持ち、自然や野生生物について知ってもらえたら嬉しいです。令和元年5月には、「NPO法人ふじ環境研究所」を立ち上げました。これまで続けてきた森林保全活動や研究活動、自然観察会や冊子の作成など、ふじ環境研究所で担っていたらよいと思っています。

富士山保全が広く市民を巻き込んだ活動になるために、それぞれの世

代が問題意識を持つことと、やりぐたえを感じてもらうことが重要です。例えば、森林保全が持続的に推し進められるため、一般市民だけでなく学校や企業などと連携することが可能か、そのためにはどうしたらよいか、色々考えて環境教育を仕掛ける必要があります。ふじさんネットワークとしては、その仕組作りや、富士山活動に参加する若年層獲得への効果的な取り組みの検討にも力を入れてはいいです。

これからの ふじさんネットワーク

世界文化遺産に登録された後、登山者に1,000円の富士山保全協力金の負担をお願いして来ましたが、多くの人が協力してくれるようになりました。みんなが世界の宝物になった山であるという誇りを持ち続けてほしいです。富士山はいつの間にか気軽に行ける山になり、来訪者が増加・多様化するにもなって俗化し品位が落ちてしまいました。日本人にとって遙拝や登拝の信仰の対象として大切な山であるということ忘れてはいけません。

そこで、信仰の要素を少し取り

入れて保全意識を喚起するのも効果的かもしれません。例えば、改めて白い絆纏(はんでん)を富士登山の正装に認定し、白い鉢巻と杖の登山を推奨する。昔の登拝のスタイルがファッションになるように働きかけ、

行としての登山が普及したら面白いと思います。多くの人々が郷土の自然に関心を持ち、日常会話で富士山の話題が上がるような地域社会を作る発信源に「ふじさんネットワーク」がなっていたら素晴らしいと思います。



山田 辰美 (やまだ たつみ) 氏

1952年生まれ。常葉大学名誉教授。専門は応用生態学で「ビオトープ」を日本に広めた一人。特定非営利活動法人「里の楽校」理事長、特定非営利活動法人「ふじ環境研究所」代表など。平成19年度よりふじさんネットワークの副会長を務める。富士山を窓口とした環境教育に熱心に取り組み、子ども向け・企業向けの講座などを実施している。『富士山自然大図鑑』(静岡新聞社)、『ビオトープ教育入門』(農文教)、『自然遊び入門』(静岡新聞社)など。